津軽藩大量死事件とその後

野原　憲次

§

この春まで勤めていた社会部デスクの職を退いたばかりの斉田五郎は、やっと暇ができたとばかりに、あてのない旅にでも出ようかという気分になった。そんな矢先、跡を託したはずの渡辺から電話が入った。

「退職してから、もう一月もなるのに先輩から連絡がないもんで、編集局長も気にしていたので電話してみました。――先輩、すっかり気抜けして倒れ込んでいるのかと思いました。その調子じゃ、まだ大丈夫のようですねえ」

五郎の元気な声に幾らか安堵したのか、渡辺はいつもの声に戻った。

「ああ、やっと、地獄のような毎日から解放されて、先日も念願の亡妻の七回忌を済ませ、墓もどうにか建てたよ。これで家内への義理も果たせたと思っている。これからは娘を当てにせず食事や洗濯が自分できるように近所の料理教室に通い、みそ汁や簡単な惣菜作りに孤軍奮闘しているところさ。だがこうしてみると主婦業って奴も存外、本格的にやりだすと大変だとしみじみと判った。今度は君を招待するので俺の手料理でいっぱいやろうや。――それはそうと、君が今頃から電話を寄こすところをみれば、のっぴきならんことでもあって、居残りしているのだろうよ」

「ああ、――図星ですよ。突発的にニュースが飛び込んで来て、出掛けた遊軍からの原稿待ちってところです」

世間じゃあ、とうに真夜中だというのに受話器から流れてくる活気には妙な懐かしさをおぼえる。

「先輩！これからは高齢社会ですから、退職してからがもっと生きなきゃならんと違いますか？　私ら団塊世代の人間にとってはこれからどう生きるかが重大な問題でもあるわけなんですよ」と一喝された。

「それじゃあ、俺も、これから先の人生設計や生甲斐探しを真剣に考えなきゃなら

んのだなあ。しかし今更、社交ダンスやカラオケでもあるまいしなあ」
「そりゃあ、そうですが、私にとって先輩は、最も身近な水先案内人みたいな存在ですから、――しっかり頼みますよ。まあ暇ができたら、ご先祖ゆかりの地でも尋ねてみるといいと聞いたことがありますよ。――先輩は江戸っ子だから関係ないかな……」
（――そうだ。幼い五郎を膝にのせて祖父がよく話してくれたことだが、我が家の先祖は津軽の下級武士の出だと聞いたことを思い出す。この際、我が家のルーツを探ってみるか）詳しくは判らないが、何でも身分の低い足軽で、普段は農地を耕し、藩主から「お触れ」でもあれば、物頭様の許へ駈けつけるといった程度の下級武士だったらしい。

――江戸末期に近い頃、ロシア使節は盛んに日本との通商を求めてきたが、鎖国を盾に埒が明かないことに業を煮やしたロシアは、数次にわたって蝦夷地周辺の島々を襲い、陣屋や番所を焼き払って食料や武器を略奪するなどの暴挙に出たという話が伝わっていた。
やっと、幕府は北方警備の重要性を悟り、松前藩を急遽、陸奥梁川に転封し蝦夷地を幕府直轄とした幕府は、津軽藩や秋田藩、南部藩らに蝦夷地警備を命じた。
津軽藩は一番手大将の御馬廻組頭であった竹内某なる重役を先頭に藩士約五百余が従った。目的地である蝦夷地のソウヤを目指し、一ヵ月余を費やしてどうにか最北端に到着した。ところが間もなく、再び一行のうち百余名に幕命が下り、知床半島西岸のシャリ警備が命ぜられた。
一番立三十名は勘定人加勢の田中某を筆頭に小頭役の斎藤勝利が加勢した。それには足軽十一人、大工・鳶七人、郷夫十二人で出立。続いて二番立、三番立と従った。シャリは宗谷岬よりオホーツク海に沿ってやや南下した知床半島西岸にある。
七十七里もの陸路を二十日余りで踏破し、やっとの思いでシャリ陣屋に到着する。急遽、越冬することになったため、総勢は近くの山林から材木を伐り出し、三棟の陣屋と板倉を築き越冬に備えた。
蝦夷地の冬は厳しく慣れない風土と寒さ、栄養不足による浮腫病により七十二名の藩士たちが次々と北辺の地で犠牲となった。このシャリでの越冬秘話は藩の「恥部」として「緘口令」が布かれ、藩の公式記録にも載せられなかったーー。

数日後、五郎は渡辺に電話を入れ、我がルーツを探す旅に出る、と大見得を切った。それは、江戸末期の蝦夷地（斜里）で起こった「津軽藩士越冬中の大量死事件」でもあり、我がルーツにも繋がることでもあって、自分の耳目で現地取材してみようと、「北海道へ行くぞ」と宣言した。

「そりゃ先輩、何ともうらやましい限りですねえ。僕も早く退職して悠々自適とやらと洒落てみたいですよ。紀行文でも書く心算で、気軽にやってみることですかねえ。ボケ防止にもなりますよ」

聴き慣れたダミ声が周囲の雑音に紛れた。

「――そんな大それたことじゃあないさ」

「ご先祖様調べですか？　そりゃぁ、いい供養になりますよ。私だって、この忙しさから早く解放されて、自由を謳歌したいですよ。私が直接お手伝いせにゃぁ、あかんのですが、それが無理なんで、『斉田番』ということで、その役を岸井君に頼みましょう。彼女は入社以来、先輩が目を掛けてきた子だから、きっと快く引受けて呉れるでしょう。は―あ、むしろ喜びますよ。先日も先輩の噂をしていたようです。それより、たまには社に顔を出してくださいよ。後ほど、彼女から電話させます」

受話器から漏れてくる雑音が今となってはむしろ懐かしい。

今後、何かと頼むこともあるから、と現職に戻ったときのように大きく笑った。もしかすると、こんなに大声で笑ったのは久し振りだったのかもしれない。家内を早く失ってから、一人娘と暮らしてきた。それなりに子育ては難しく、時折、考え方の行き違いから気まずいことも多かった。家内を亡くした子育てには気苦労が絶えなかった。それでも、娘はぐれることもなく、どうにか社会人になって小さな商社に勤めることができたのだからせめても幸いだろう。

新聞社を辞めてから、まだ二月も経っていないというのに、新聞社というところは、こうも慌ただしく時間に追われた戦場だったのか、としみじみ納得がいった。なかでも、社会部に籍を置いて過ごしてきた五郎としては、連日のように締切に追いまくられ分秒の戦いといった方があたっている。それが今では多忙を極めていた時間を無性に懐かしく感ずる余裕すら感じているのが不思議でたまらない。人間という奴は実に勝手な生き物で直ぐ無いものねだりをする。――欲張りだ。

独り晩酌をしながら食事を摂っていると、電話が鳴ってＦＡＸが流れてきた。差出

人は「斉田番」を渡辺から頼まれた岸井聡子からである。
「ご無沙汰しております。ゆっくりお休みになれましたか？　デスクからお話聴きました。喜んでお手伝いさせていただきます。だって、私とても嬉しいんですもの。取り敢えず、関係記事を送りました。では、次の指示を待っていま～す」
　岸井聡子は娘とは同じ女子大出で学生の頃から我が家に出入りしていた親友だ。入社してからも何となく目をかけていた。
「良いものが書けたら、きっと送って下さいね。それから、冴子とは携帯で時々連絡したりして、会ったりしていますので、ご心配なく」と、溌剌した若い声が流れた。
ＦＡＸの末尾に、若い女性が使う丸文字で、
「素晴らしい作品をお待ちしております。くれぐれもご健康には留意してください」とあったが、何の束縛もしがらみもない自由人であることにあらためて実感がわき、同時に空虚感もうまれた。久し振りに旅に出る決心をした五郎は、中高生のような躍動感につつまれ、近くのコンビニへ出掛け、二、三泊分の旅支度を整えた。
その夜、勤めから帰った冴子から了解をもらった。
翌日、昼に羽田を発つと、三時には女満別空港に到着した。
梅雨に入った都会とは違って、澄みきった初夏の空港から網走行のバスに乗った。広大な農地をトラクターだけがゆっくりと動くが、人の姿はさっぱりみえない。遠くまで整然とした馬鈴薯やビートの畝が続き、時折雑木林の向こうに白っぽく光った湖面が反射してみえる。緩やかな坂を下ると、左手の森林のなかに群青色の湖が覗いていた。
湖畔には「斉田番」を自認している聡子がネット予約したくれた旅荘で自然豊かな静かな佇まいをもっていた。観光コースから離れているのか鄙びた旅荘には泊客も少なく、湖畔では地元の太公望がのんびり釣り糸を垂らしているほかは人影もない。夕食は近海で揚がったという魚介類を主に、山菜や新鮮な野菜が盛付けられている。仲居さんを相手に明日出掛ける斜里町のことについて情報を仕入れた。
翌朝は少し早起きして、タクシーで網走駅まで行き、そこから斜里行きのバスに乗る。右手一帯には農地が広がり原生花園や湖沼が点在し、左手には群青色のオホーツク海が車窓いっぱい広がっていた。
最果ての地知床半島を眺める斜里駅前でバスを降りた。駅前通りには申訳程度の商店街があったが、人影はなく閑散としている。町並みを囲むように畑地が広がりそ

の向こうには森林や荒野が緑濃く囲んでいた。
駅近くの観光案内所へ飛び込むと、紺の事務服を着た中年の女性がのんびりと応対する。忙しない都会とは違って、この辺りでは空気や時間までも長閑に流れているらしく、無機質な動きを感じさせない。
都会生活の長い五郎には何とも不思議な得体の知れない流れに身を置いているような心地だった。
兎も角、女が呉れた案内図を手がかりに町の図書館へ行ってみることにした。地図を頼りにアカシアの街路樹に囲まれた一角に、レンガ造りの瀟洒な建物を見つけた。玄関を入ると、中高生らしい男女が屯してとても賑やかな雰囲気で、時折、若やいだ声に混じって、大きな笑い声だって聴こえてくるが、別に注意することもないらしい。
勝手に社会から隔離されたと思い込んでいた五郎だったが、その華やいだ空気にいつしか溶け込むと、むしろ心地よい身の置所にもなって、豊かな涼やかな気分に包まれた。
　それでも長年の習慣なのか、地元紙、中央紙と目を通した。小一時間余りかけて大よそ新聞を見おわると、カウンターいた司書の一人に、思い切って調べたいことを概略話すと、
「それじゃあ、町史が良いですよ。確か事件のことが載っていました」と書庫に案内され、他にも数冊の書物を探してくれた。
そのなかには、祖父がよく話してくれた悲惨な越冬事件を扱った地元紙の記事も幾つか載っていた。

§

――この悲劇を知るきっかけとなった地元紙の記事には、シャリ陣屋行に合流した津軽藩の足軽目付小頭だった斎藤勝利が遺した「松前つめあい詰合日記」が発見されたことで、この悲劇が俄かに歴史の舞台で脚光を浴びた。当時、二十二歳の若者だった彼が道中の有様を克明に綴った日記であり、その書き出だしは江戸末期の文化四丁卯年（一八〇七年）である。
幕命を受けた津軽藩（弘前藩）では直ちに警備隊五百余名を編成して出立。津軽海

峡を渡り、箱館を経て道北端の宗谷に向かう廿日余の行程だった。宗谷に到着する間もなく、その一行のうち百名に斜里行きの命が下った。旅装を解く間もなく、最果ての要衝、斜里への転進を余儀なくされた。一行が斜里に到着したのがすでに秋で、やがて流氷が海にひしめく厳冬期がやってきた。

郷里の津軽とあまりにも違った自然条件のなか、大部分の藩士は酷寒の冬の最中、浮腫病を患い死んだ。浮腫病とは栄養失調による壊血病で、死因は野菜不足によるビタミン欠乏だったのでもあろうか。

最初の犠牲者は人夫の富蔵だった。その数日後、日に一人の割合で死者が出、暮れの二十八日には四名もの犠牲者がでた。その後も死者は一向に減らず、炊事や水汲み、薪集めなどの雑事をこなす雑役にも事欠き、手伝いのアイヌたちにも恐れられ、援助も遠のいた。

そんななか、大晦日を前に松枝と熊笹を組み合わせた粗末な松飾りを作り新年を迎えた。

空けて文化五年年始で顔を合わすが、なおも死者は続き元日から四日までに五名が死亡。更に翌日から末までに二十二名が死亡。以降も死者は絶えず、更に三月二日には六名が死亡した。

やっと宗谷への養生願いが聞き届けられ、シャリを離れる者も少なからず居たがそれらは皆途中の網走や紋別で息絶えてしまった。

四月二日（太陽暦四月二十七日）、海を閉ざしていた流氷がようやく去り、船便が沖に姿を見せることを待ちつつ、帰還の望みを繋いだ。

本格的な春の訪れとともに松前からも早飛脚も姿を見せ、生存者たちも浮足だった。やっと六月に入って、藩士達も袷で過ごせるような温かさとなったころ、足軽目付の桜庭又吉が閏六月十三日、最後の犠牲者となった。

六月二十四日、シャリ陣屋の沖に四百五十石積みの交代船・千歳丸が現われ、生存者達は武器類、米、などをまとめ、撤収の支度をするとともに、死者七十二名の墓標を建立し、シャリの地を離れた。

ところが、この痛ましい大量死事件は、藩内では「恥部」として扱われ、厳重な緘口令が布かれ、藩の公式記録にも載せられなかった。生存者の一人だった藩士・斎藤勝利が遺した「松前詰合日記」が昭和二十九年になって発見され、やっと日の目をみたのだ。結局、斜里陣屋で警備にあたっていた藩士達はロシア軍艦との戦いで

敗れたものではなく、シベリアおろしの冬将軍に挑み、見事に負けたといってもいいーー。

多忙な仕事とは全く無縁な存在となった五郎だったが、都会の雑踏から逃れてやってきた北国をゆったりと流れている至福の時に心を和ませた。天然のクーラーでもある海風の恩恵を受けながら、司書に助言をもらい、史料を読み漁り、数枚のプリントを手にして、一旦終了した。

借用した文献や史料を返却し、帰りかけた五郎に先程の司書さんから声がかかった。

「先程から、熱心に調べものをなさっていらしたようにお見受けしました。私どもでお役に立つことがございましたら、どうぞご遠慮なくお申し付けくださいませ」

「ああ、ありがとう。でも、私も観光客の一人のようなものですよ。定年退職後少し暇ができたので、我がルーツに関することを調べてみたいと思い立ち、津軽藩士の大量死事件を調べるために現地を見たいとやってきたのです」

「――」

「最近、地元新聞にも連載された『封印された悲劇』という記事を目にし、私の先祖につながる事件ではないかと尋ねて来たのです。あとで、津軽藩士殉難慰霊碑や復元された津軽陣屋跡にも尋ねてみようと考えていたところです」

見知らぬ町の図書館で、みすぼらしい初老の男に話かけてくれるなんて、存外親切な女性がいるもんだ。

五郎はざっと自己紹介方々、旅の目的を大よそ話すと、彼女は安岡真由美といったが、五郎自身、若い女性と親しく会話するなんて久し振りのことである。

旅の空で他人の親切を受けたことが、余程嬉しかったのか、旅の空で見ず知らずの美女から受けた好意が、初老の純な心を擽った。

「今夜は、駅前のビジネスホテルに泊まる予定でいますから」と、ホテルの名をいい、上着のポケットから名刺を探ったが、もう名刺とは無縁だと気づいた。鞄から手帳を出すと、一片を破り、名前と携帯電話の番号を書いて渡した。そんな大人のやりとりを傍で眺めている少女がいた。真由美の陰から五郎の顔を覗くと、オカッパ頭の少女は、ニッコリ笑い、ピョコンとお辞儀した。

「もし、よろしければ、私の高校時代の恩師で郷土史家でもある先生のお宅をご紹介しますが如何でしょうか。アポイントがとれましたら、お宿に連絡しておきます。

それでは閉館が五時ですので、お迎えにあがります。それまでお時間がございましたら、この子に藩士殉難慰霊碑と津軽藩士の陣屋跡を案内させますが如何でしょう。この子、私の妹で陽子といいます。土日には、ボランティアとして、本の整理を手伝ってくれています」と紹介する。さっそく、彼女の妹の案内で、町民会館の近くにあるという殉難碑の丘を目指して歩いた。道々、彼女が通っている中学でも、最近、郷土史家を招き郷土史の学習をしたといった。

この越冬事件のように、一旦は歴史の表舞台から葬り去られた悲劇が現地を尋ね、藩士たちが酷寒の地を警備するために過ごした津軽陣屋跡の様子や殉難碑文に接することで、胸に迫るものを感じた。少女の熱心な説明に耳を傾け、五郎はノートを取った。

「小父さん、私ねえ、これから吹奏楽の練習があるの」と遠慮がちにいう。

「それじゃぁ、毎日練習しないといけないのだろう。私の娘も、中学、高校とブラバンをやっていたから、その練習が大変なことよく分かるよ」

「でも、私達の部はそれほどレベルが高くないの。精々、運動会の行進とか学校祭の開幕演奏するくらいのものだわ。勿論、管内には吹奏楽コンクールだってあるけれど、中々上位に食い込むだけの実力はまだないもの。それでも私達部員の誇りは、お盆のねぷた祭りは、弘前から贈られた山車を牽くとき、大人から習った和笛や太鼓で囃し方に加わるの。ハッピ着て、手拭を頭に巻いてさ」とおどけた声を出し、真っ白い歯並びを見せて嗤った。

「そりゃあ、凄いことだよ。地元の行事に参加して、貢献するなんて誰でもできるもんじゃないさ。大いに自慢してもいいことだよ。小父さんなんてこの年になるけど、社会奉仕すらやったことはないから恥ずかしいよ。そんな部員ばかりだと、きっと、これから素晴らしい演奏ができるさ。音楽はテクニックだけじゃないさ。魂の演奏ができることを祈っているよ」

「そ～おぉ」

「それに、小父さんみたいな津軽藩士の末裔としては、こんな嬉しいことはないと思っている。ご先祖の御魂がいつまでもこうして地元の人々の心にあって、大事に祀ってくれるなんて、本当にありがたいと思っているよ。改めて小父さんからも礼をいわせていただきます」と帽子をとって、白髪頭を下げた。

少女は大きく手を振って土手を下ると、街角へ消えた。

妻に先立たれた後、娘の冴子と二人暮らしを続けてきた五郎だが、互いに出勤間際で慌ただしいこともあってか、ろくな挨拶だって交わしたことはない。そんなことをいえば「そんなこと、絶対ないわよ！」と一蹴されるが、互いに干渉しない日々が続いていることも確かで、今更変える必要もない。

冴子にしても、彼氏の存在をまだ父親に紹介する段階ではない、と思っているらしいが、五郎はすでに知っていた。

安岡真由美は冴子と同じくらいの年輩だが、物静かでおっとりした性格のお嬢さんのようにみえる。そんな埒もないことを考えると、全身に若い血が巡り、足の運びまでが軽快になった。人間の心理とはまことにもって不思議なもので、わざわざ列島の北の外れまで来て、やっと分かったような気になった。海風が潮の香りを運んでいる。

漁港へ向うと、漁を終えて戻った漁船が狭い漁港のなかにひしめいて、荷下ろしに忙しい。漁師たちのしわがれた声がそこここから聞こえ、競りが始まったようあだが、波避けブロックに座って、一服すると、先ほど図書館でコピーしてもらった史料にざっと目を通してみた。シャリという現地で史料を読むと、また別の臨場感が湧いてきて想像力を煽りたてた。新鮮な場面が連続写真のように次々と現れ消えた。

§

――斎藤勝利が記述した「松前詰合日記」がどうして、「この此いっさつ壱冊はたけん他見むよう無用」とされ、長い間歴史舞台から葬り去られていたのかと疑問を持った。

それに文化三年には、幕府が出した「露船取扱令」というのがあって、ロシア船が来たら説得し帰らせるように諭すのだ。どうしてもこれに従わぬようであれば、状況に応じて打ち払えという恐ろしいものだった。

それまでの友好的解決を主眼としたものから一変し、発見し次第打ち払えとは実に恐ろしいことでもある。無断で上陸してきたら捕縛または切り捨てよと強硬方針に変わったのだ。それに応戦すべく、警備態勢も一応整えられ、特に宗谷や斜里、樺太の警備が厳重にしかも大がかりに進められた。それ以後、ロシア人との接触は起こらず、津軽藩士はロシア人ならぬ辺境の厳しい自然（冬将軍）と遭遇し、ついに

屈服せざるを得なかった――。

紺碧の海と空。湾曲した海岸線の延長上にある知床半島をぼんやりと眺めながら、太陽に熱せられたコンクリートブロックに寝そべっては空を見上げる。やはり温泉に浸ったときのように痔に効くらしい。斜里は小さな漁師町だが、それでも駅前通りには商店街が並び、不釣合いなアーケードがあった。

駅前の蕎麦処と染め抜かれた暖簾の店に入った。昼食時であったが、誰もいない店内を見廻しながら、奥に向かって「天ぷらそば」と大声で叫んだ。

無愛想な女がコップに入れた水をテーブルに置き、注文を聞くとさっさと板場へ消えた。薄暗い店の壁には、観光用のポスターが貼られていたきりで、閑散としたものだった。勘定をしながら駅の方角を聞き、最果ての町を珍しげに眺めながらぶらぶら歩いた。

午前中に立寄った観光案内所に気づき、蕎麦屋で見たポスターのことを思い出して話してみると、「あの場所は、ここから少し離れたとなり町の小清水原生花園というところですよ」とパンフレットを手渡し、明るい返事が返ってきた。

「今日はここで宿をとることになっているのですが、その前に人と会う約束があるので、五時までには戻りたいのですが、――時間は大丈夫ですかねぇ」

「え、え、大丈夫ですよ」と頷いた。

「お客さん、タクシーお呼びしますか？　三時間もあれば、充分戻って来れるでしょう」

優しい言葉につい絆されてタクシーに乗った。

運転手はごく当り前のようにこの辺りについて説明した。勿論これから行く原生花園の話を訊きながら、窓から入る冷たい風を受けながら車は走った。車の通りも少なく、国道でも滅多に対向車にも会わない。

途中の幾つかの集落を走り抜け、防風林のなかの無人駅舎を横目で追いながら車が走る。さすがに北海道だけのことはある。道はどこまでもまっすぐに一直線に続いている。制

限速度より少し速いようだ。

前方左手の草原のなかに湖沼のような水辺が現われ、広大な花園が出現する。

オホーツク海に沿って走る釧網線と並行して、国道が走りその傍に広大な面積を

もった自然公園が広がっている。原生花園の真ん中には当沸湖という湖があって、野生の花々がいっせいに咲き誇り、所どころ放牧馬が屯し、尻尾で鞭のように振りながら虻を払いながら、ゆっくりと草を食んでいる。
海岸と国道に挟まれた線路には、この観光時期にだけ臨時停車ができる駅があった。そこには土産店が並んでいて、中年のおばさんたちが接客に急がしそうだ。留守番をしている娘の冴子に土産をと思い、気に入りそうなTシャツと木彫のブローチを店員のアドバイスを聞きながら買い求めた。先程の運転手の姿を見つけると、タクシーの方から近寄ってきた。宿の名をいうと、旅の疲れが出たのか、ウトウトした。少しは賑わいのある駅前でタクシーが止まった。五郎はリックを肩に案内を請うと、四十がらみの黒服の男がむっつりした無愛想な顔を出した。
不審者でも見るような目付きでジロリと五郎を一瞥し、カウンターに戻ると、部屋番号をいうなり、キーをカウンターにのせた。
部屋で、休憩していると、午後五時を少し廻ったとき、フロントから電話が入った。昼間とは違って、少し派手目のブラウスを着た安岡真由美が赤いバックを手にロビーに立っていた。昼間の地味な制服から解放された派手目な服装の彼女は、私を見つけるとにこやかに笑顔をつくり、軽く会釈をした。
しかも蝶が蛹から羽化したような彼女をみつけて驚いた。大きく笑った真由美は、五郎に近寄るなり、
「お疲れになったでしょう。――少しはゆっくりなされましたか」
と、下の方から覗き込むような仕種で見詰めた。
五郎の身体は重心を失って、言葉までが羽が生えて宙を彷徨い、あらゆるしがらみから解きはなされたかのように目眩に襲われた。
退勤後、間もない疲れた身体を見知らぬ一介の旅人のために貴重な時間を割いてくれたことに深く敬意を払った。
おもむろに、小清水の原生花園を見に行って来たことを話すと、
「それは良いところに行かれましたわ。私からお話すればよかったですわねぇ」
と笑みがこぼれた。
若い女性に似ず絶えず相手の身になって考えてくれる細やかな気づかいが何とも芳しかった。彼女にとって、退屈しのぎに旅のオッサンに付き合せてしまう迷惑さも一旦は思案したが、そんな愚かな空虚さは持ち合わせてはいないことに逸早く気づ

いた。よしやあったとしても、今更どうなるものでもない。
「この町は、ご覧のように狭い町ですが、バスの便が悪いものですから、大抵は自分で車を運転する方が便利なのですよ。長旅でお疲れでもございましょうが、歩くよりましだと思いまして……。さあ、こちらからどうぞ」
彼女は、助手席のドアを開けた。真っ赤な軽自動車だった。
最近の若い女性にはめずらしい礼儀正しさとそれでいて、ごく自然な息づかいが二人を包む赤い空となって自由気ままに走った。
五郎は、女性の車に乗ったのは娘が運転する軽くらいなもので、それ以外は乗せて貰った記憶は殆どない。すっかり面食らっていた。
流石に若い女性好みに設えており、赤い空間は香しい吐息で充満し、後部座席には、二匹の動物のぬいぐるみが、さも当然だ、というように占領している。恰も他者を寄せつけないような風格があった。
夕ぐれの農道を郊外へ向かって軽快に走ると、郷土史家だという地元高校を定年退職した白髪の先生が会って下さり、斎藤勝利の「松前詰合日記」ついて熱心に語ってくださった。
町の中心部の小高な丘へ向かう公園には数十本の桜が慰霊碑を囲むように植えられていた。残念ながら開花からはとうに過ぎて葉桜なのだが、真由美の説明で、今では友好都市となった弘前市から贈られたものだということを知った。二人がゆっくり登って行くと、午前中、陽子と尋ねた殉難碑が夕日に染まっていた。
「さっきの郷土史家の先生も、あの悲惨な事件がまるで我がことのように熱心に語ってくださったことに、私は深い感銘を受けました。二百年前、一度は歴史の表舞台から消えた史実が、今こうして日の目をみることができたことで、藩士らの志が少しか報われたかと思うと、我々、津軽藩士の末裔としては限りない喜びを感じています。よくぞ、殉難慰霊碑建立や津軽陣屋跡の復元、また慰霊祭には弘前市から寄贈されたねぷた山車の町内巡行など、地道な郷土史家の掘りおこし活動が実を結んだといえます。消え去ろうとした過去町挙げて掘り起こして、歴史に厚味をつけて大事保存なさっているなんて、素敵なことですねえ。それにあの事件は私ら末裔につながる者として、まことに嬉しいことなのです」
海を望む砂丘には丈の低い浜茄子の潅木が桃色の花を咲かせていた。また、原生花園で覚えたばかりのエゾスカシユリやハマエンドウのうす紫の可憐な花が砂地の草

叢に混じって埋もれていた。
「この町でも、最近、歴史を掘り起こす活動が盛んになり、今まで隠されていた史実がしだいに明らかになりました。私の中高時代とは随分変わって、郷土史研究サークルにも力を入れているようです。私らの青年会でも時折、郷土史家の方をお招きしてお話を聞く機会もあります」とハンドルを握りながら車を走らせた。
殊にこの悲劇は、津軽藩にとっては大変な不祥事だったらしく、藩でも極秘理にされていたこともあって、足軽目付の斎藤勝利が遺した「松前詰合日記」が二百年もの長い間、「他見無用」として扱われ、歴史の表舞台から消えていたことが頷ける。津軽藩士の墓がある禅竜寺に到着すると、幕吏が法要を営んだ際、書き記した過去帳の話を確認して墓石を見て回った。それぞれの藩士たちの墓が並び、苔むしてはいたが、掃除は行き届き、花も手向けられていた。
昼間は観光客も訪れていたが、今はもう誰もいない。
「私の場合は祖父や父から口癖のように聴かされたを想い出してみたので、私もを思い切って調べてみようとやってきたに過ぎません。だって、ご先祖様の供養になるかも知れませんからねぇ」
と、風雪に耐え苔むした墓石に向って、手を合わせた。
「あなたは、若いのによく郷土史についてご承知で驚きました。流石は、図書館司書をなさっているだけのことはありますなあ」と水を向けると、
「知床が世界遺産に認められたことは私達地元町民として、とても誇らしいことだと思いますが、でも、その昔、わざわざこの辺境の地まで警備のためにやってきて、不幸にして越冬最中にして落命され津軽藩士の方々のご苦労を考えますと、複雑な気持ちにさせられます。私たちが長い間忘れていたとはいえ、今後とも尊い御魂に対し、いつまでも感謝することを忘れてはいけないと思っておりますので……。それに、最近、郷土史研究会の奔走によって、藩士の斎藤勝利が記した「松前詰合日記」が発見されたことで、この悲劇もやっと歴史の表舞台に出たわけで、これが縁で弘前市と斜里町との間に友好都市の縁組みもできました。町民の強い要望で、弘前市から『ねぷた』が寄贈され、この地で散った藩士たちの御霊に対し鎮魂するための慰霊祭には、『しれとこ斜里ねぷた』の山車が熱心な町民有志によって継がれ、町中を練り歩きます。私達青年会の人らも積極的に参加して、ねぶたの山車を曳くイベントもやっています。私も妹もその一員ですの」

「そうですか……。そりゃ僕ら津軽藩士の末裔としても、嬉しい限りです」
「ですから、その勉強会で教えていただいたことなのですよ」
遠く、夕陽を映した海の彼方に目をやりながら、真由美は感慨をこめて語った。
「弘前市から贈られたねぶたの山車が町を練り歩くことで、この地を護り、そして不幸にも志半ばで逝った戦士たちに想いを馳せ、しだいにこの小さな町にとっても、華やかなお盆のイベントになりつつありますわ」
（彼女の饒舌さは昼間とは違い、はっきりとした意見をもっていて、それが町の活性化にも繋がっているという。さすがに今時の女性だ）と誇らし気に見とれた。
「明日が休みなら、知床へもご案内しても良かったのですが、生憎、勤務なものでご一緒できなくて残念です。今度、いらした時の楽しみに取って置きますわ」といった。
土日には、わざわざ利用者のため、開館しているらしい。

§

「私は明日、真っ直ぐ、稚内へ行ってみようと考えています。宗谷には警備本部があったと書いてあったもので、どんなところかこの目で確かめてみたいと思います。宗谷岬も見てみたいので……」
「それはいいですわねえ。私もご一緒させていただきたいところですが、――残念ですわ」
「私は稚内から、一度東京へ戻ります。後日、網走湖荘に泊る予定でいますので、安岡さんにお電話差し上げたいと思います。ご迷惑でなければ……」
真由美は大きく頷いてみせた。
雑草で隠れた細い道を戻りながら、赤い軽は町の方角へ目指した。
見ず知らずに旅の男に親切にしてくれるとは、何と優しい心遣いであろうか。それには、甘えることなく、断りながら、
「この話を冊子にまとめるまでには、多分、まだ二、三回は北海道へ来ることになりますので、その節には是非、お会いできると嬉しいのですが」
ごく自然に、この度のお礼にと理屈をつけて夕食に誘った。
快く承知してくれた真由美の赤い車が西日の傾きかけている駅前通りへ向かった。

真由美がハンドルを握りながら語ったところでは、津軽のねぶたを夏祭りのイベントとしてやろうということになって、地元青年会では数度に亘って郷土史家を招いて、学習会を開き、熱心に教えを受け、弘前市の観光課の方を招いたりして交流し合ったとも、遠慮がちに話してくれた。それでもまだ充分に調べ尽くしたとはいえません、といい終ると、

「これを機に、私も斉田様のお手伝いをさせていただきたいと存じますわ」と遠慮がちに呟いた。

「それは願ったり叶ったりです。私もこれを機に、何度か斜里にも寄らせてもらいます」

「そうですか、それじゃ愉しみにしておりますわ」

「やはり現地に来てよかった。それに親切なお嬢さんにも、お会いできてとても嬉しい」

五郎の差出した手を真由美の華奢な白い指が絡んだ。

津軽藩士たちの霊が、こんなにも親切なお嬢さんを引き合わせてくれたのかと感謝した。商店街の駐車場に車を置き戻って来ると、彼女が懇意にしているという食堂兼居酒屋の暖簾をくぐった。

さっそく、ビールとおつまみが出て、乾杯し、改めて簡単な挨拶をし、なんとなく自己紹介をする形になった。

地物の毛蟹、ホタテ、海胆とテーブル一杯に並べられていた。美味しさに会話が途切れ

てしまいそうだ。ある程度の食味が終ってから、また話に夢中になった。

旅先で親切にされたことがやたらと五郎には嬉しかった。

「短大での二年間を除けば、ず～っとこの街で過してきたのですもの」

「そうですか、よそへ行きたいと思ったことはないのですか」

「いいえ、お嫁に行くまで、此処に居たいですわ。離れたくはありません」

ときっぱりいい切った。

「それじゃあ、お婿さんは斜里に住んでくれる人がいいですねぇ」と、水を向けると

「でも、もう少し社会勉強してからでも、遅くはないでしょう?」恥ずかしそうに俯いた。

ここは、北の漁港であるせいか、年中、寒流系の新鮮な魚介類がスーパーに並んでいるとのことだが、ここも都会化されてしまっているには驚かされた。毛蟹も近くの漁場で獲れるので浜値は安い。料理を運んで来た女将さんが、

「うちは、食べ物だけは新鮮で、どこにも負けない。でも、近所には同じような食堂がないから、比較ができないわね」と笑いながら、追加注文を並べて消えた。

北海道の地酒についての話になると、こちらの話が聞こえたらしく、板場の若い男が話に割って入った。

「そりゃ、北海道の地酒といえば、たくさんあるが、俺のお勧めは、増毛の国稀だぁ～」と、板場の男が答えてくれた。その酒をと注文すると、すぐに私たちの席まで持って来てくれた。

「夏は、やはり冷がいいねぇ」

四合壜を片手に、コップを置き、冷えたのを半分くらい注いで、立ち去った。そういえば、昼間読んだ斜里町史に、松前から宗谷に来る行程のなかに「マシケ」と言う地名が出ていたように思った。

彼女が日本酒の「国稀」を勧めることもあって、ついつい四合壜を独りで空けてしまった。彼女をタクシーで早目に送り届けると、帰り路、日の落ちた最果ての町並みを眺めながら、しばらく酔いを醒ましつつ、通りを歩いた。宿に戻ると、フロントから電話があった。

「良かったら、お風呂をどうぞ」と案内された。

風呂上りに、フロント氏に話を聞くと、

「ここの温泉は、お湯の温度は低いので、ボイラーで沸かしています。温泉にはある鉱物を含んだ泉質を沸かしているので効用には自信をもっています。抜群です！温泉とはっきり呼ばせていただき、表示もさせて貰っています」彼は胸を張っていった。

図書館でコピーさせて貰った史料を寝転びながら読み続ける。

最果ての地で無残にも散っていった津軽藩士の生き様に想いを馳せた。

そのうち、旅の疲れが出てきたか、酔いが回ってきたのか、いつの間にか、ウトウト寝入ってしまった。

五郎は夢のなかで、一人の武士と思しき人物が現われた。

下級武士らしい彼は防寒頭巾を被り、羽織の上から毛皮をまとっているが、武士の

誇りである脇差だけはしっかと握りしめ、眼光するどく不気味な輝きを放していた。
金縛りにあった五郎は声を上げることもできず息を呑んだ。
しばらく二人は一間余を離れて対峙した。
図書館で閲覧した蝦夷地に関した書物の口絵にあったものが頭の片隅にでも残っていたものか、あるいは何かの再現でもあったようにも思えるが、その辺の知識にうとい五郎だったから、当然だったろう。
その武者が近づいてくるにつれて、その輪郭から幼いころ膝の上で遊んでもらった祖父の体臭や温かい膝の感触だけが空虚な存在として残った。
二百年近い時空を越えられるものでもないし、亡霊のまま彷徨い続けているとは、到底考えられない。こうしてみると、世のなかには甚だ奇怪な事象が無数に存在し、それを科学的に解明することができないことが甚だ多いと悟った。
それにしても我がルーツに勝手に割り込んできた祖父に似た面影を持つこの男、言葉も発せず、ただ深々と頭を下げて闇の中に消えた。
五郎も慌てて礼を交わしたつもりだったが、その辺のことは目覚めると同時に消えた。彼が何かを訴えるように、右人差指を遠くへ向かって差していたが、この間、わずか数秒かまた数分か、それとも数時間のことで、現世に戻ってみると、容易に判別できるものではない。五郎はその影を追って、聞き糺したかったが、言葉が喉に詰まって声にならない。
しばらくすると、何事もなかったように現世に戻った。
目が覚めて時計を見ると、まだ零時を少し回ったばかりだ。
不思議な夢に起こされて、しばらく布団の上に胡坐をかき、徐に枕元の灰皿から吸いさし煙草をとって火を付けると、深く吸い込んだ。
たった今、夢に現われた武士のことを考えた。
（あの人物が祖父の話のなかに出てきたご先祖様の亡霊ではないか。だとすれば、あの男と話してみたかったが、すぐ消えたので、訊く間もなかった。取材とはいえ、わざわざ現地を尋ねてきたことに感謝し、姿を顕したのかもしれない）
それとも、越冬中に犠牲になって亡くなったご先祖様たちの霊が喜んでくれたのだと勝手に解釈してみたが、久し振りに根をつめたことで脳だけが活動したせいで、夢となって現われたとも考えられた。この数日集中して取材したことをご先祖たちは喜んでくれたのだろう。残念ながら表情すら詳細には分からない。きっとご先祖

が姿を現したのではないかと、不思議な体験をした。昼間の出来ごとの成果と思うしかなかった。
そう言えば、空襲を避けて、青森の祖父母の家に疎開していた時に、よく祖父が語り聞かせてくれた話があった。
今とは違い写真というものがあまり普及していなかったから、先祖たちの写真などあろう筈がない。祖父の言い癖に
「我が斎田家は、代々、津軽藩士でごもち御持やりくみ鑓組に属した足軽だったというから、身分は低かった。お城に御用がないときは野良に出て百姓をしていた」
酔いに任せてしゃべりだすとなかなか止まらない。
五郎は講談でも聞くように何となく空で覚えた。
「いくさ戦も怖いがそれよりも、もっと恐ろしいのが自然の猛威だ。その最たるものは地震、雷などさ。あの津軽藩士を襲った越冬悲劇だって、最果ての厳寒の地で越冬中に起こったものだからだよ。人間なんて幾ら威張ってみても、大自然の猛威には到底歯が立たない。ご先祖たちはいつも、自然に対して畏敬の念をもって、敬い接してきたわけだよ」
と訛りの強い津軽弁で喋っていたことを憶えていた。
こんな断片的な想いやが、図書館で読んだ津軽藩士の斜里警備の顛末の記事や祖父が錯綜して潜在意識を刺激したものであったのか。それからというもの目が冴えて眠れず、そのうち夜が白みはじめたころ寝ついた。
朝寝、朝酒、朝湯といった気分爽快な旅を懐かしみ、これでやっと世俗の垢を流したといった贅沢な気分が全身を洗った。
朝ボケもとれて、食事後、宿の清算を済ませていると、フロントに電話が入っているとの知らせがあった。テッキリ、冴子からの安否を気遣う電話だと思い、受話器を取ると、昨夜の安岡さんだ。食事のお礼の言葉とともに、
「今度いらしたときには、知床や羅臼にご一緒しますわ」といって、電話が切れた。
チェックアウトすると、夢に出てきたご先祖様の手前のあり、予約しておいたタクシーに乗り、今一度、津軽藩士が眠る墓へ花を供え、香を手向けた。藩士たちの墓は昨日来たときとは違い、ひっそりとした静謐に包まれていた。海岸線を見下ろすような丘に続いて、オホーツク・ブルーの空が、果てしなく広がり、右端に突き出た知床半島は薄青い影を遺していた。墓石を周りの浜茄子の灌木は紅色の花を無数

つけて咲いて、あたかも墓に供えられた花束のようにも見えなくもない。

§

真由美もいっていたが、知床が世界遺産に登録されたことが報道されて、日本中の人々が喜びに沸きかえり、道民たちや殊との外地元町民は喜びに沸きかえったそうだ。

厳しい自然条件がかえって開発の手を阻み、そのまま残ったといえば、皆さまからお叱りも受ける話なのかも知れないが、敗戦後開拓民が入植し、厳しい酷寒の自然条件のもとで挑戦し続けてきた開拓民でも結局、自然の脅威には勝てず、敗退したという事実を突きつけられていた。その広大な自然を取戻すべく先頭に立った地元民や協力を惜しまなかった全国の有志の苦労があった。

「ナショナル・トラスト」運動は英国が提唱したものであると聞いていたが、人間が自然破壊の重大な恐れに気づき、自然を守り取戻すために考え出されたもので、かけがえのない大地をみんなの浄財で買い戻し、自然環境を守ろうとする運動が、知床にも広がり、歴代の斜里町長が先頭に立ち、全国の心ある人々に訴えかけ、一平方メートル運動を進め守ってきたことを決して忘れてはならない。

この地を訪れた五郎の胸裡では全く別な動機でもあったが、人間たちの想いはどこかで一つに繋がっているようにも思った。五郎は、津軽藩士の悲劇の舞台に列する亡き藩士たちの末裔の一人として、鎮魂を込め、悲劇の真相に迫りたいと祈った。

上り線の電車で網走から旭川へ、そして終着駅の稚内に到着したのは午後三時過ぎで、ほとんど列車に乗り継ぎ、北海道の広さを体験した一日でもあった。

宗谷海峡一帯を望む稚内上空は、予想に違わず厚い鈍色に染まって寒々とした佇まいであったが、私は駅の真向かいにあった民宿に泊まることにして、宿の主人から宗谷に駐留したであろう津軽藩士の話を聞きたかったが詳しくは判らないようだ。

しかし、翌朝宿の主人の計らいで日本海とオホーツク海を跨ぐ宗谷海峡が一望できる野寒布（ノシャップ）岬まで。そして更に逆行するようにして宗谷湾を半周。約三十キロ離れた宗谷岬へ向かった。そこには日本最北端の碑があり、左手には宗谷海峡が横たわり、右手にはオホーツク海が広がっており、波は荒く磯辺に砕けては散っていた。

此処に立ってみて、史料にあった藩士たちの寂しさが、時を超えてひしひしと伝わってきた。宗谷線で旭川駅まで戻り、駅前から出る旭川空港行きのバスに乗って郊外にある空港に着く。辺りは畑作地帯で少し離れた処には美瑛や富良野といった最近観光客が訪れる人気スポットがある。旭川から羽田まで直行便があって便利だ。夕方には自宅に戻ることができた。

何の連絡もしなかった冴子は驚くばかりだったが、父の元気な姿をみると、安心したようだ。原生花園で買った土産に冴子は、

「わぁ～、お父さんのお土産何て、何年振りかな～ぁ。ありがとう。旅の収穫ありましたか?社の聡子ちゃんからも電話があったわ」

たった三、四日しか離れていないのに、数カ月も経ったような錯覚に陥った父子は久し振りに食卓を挟んで会話した。

寝る前に五郎が晩酌している食堂に降りて来た冴子は、五郎の土産のTシャツとブローチをつけていた。

「お父さん似合う?」といいながらも、晩酌の相手になって缶ビールを飲んだ。

五郎が酒のつまみとして、持ち帰ってきた鮭のトバを二人してしゃぶりながら、祖父が話してくれた「津軽藩士の越冬悲劇」について、夜遅くまで語り合った。

ちょっとした旅が父と子の絆を深めたかのように思えて、たまには離れて暮らすのも悪くはないと思いはじめた。これを機会に半年か、一年余りを北海道の暮らしを体験するのも悪くはないと、五郎は口火を切った。

「私が最初に泊った網走湖荘の女将さんと話したことだが、別荘として離れを貸して呉れるという話もある。第一、寒さの厳しい冬を体験しなければ本物ではないさ。食事つきで、下宿屋のようなものだが」

五郎は冴子の出方が心配だった。

「そうねぇ、凝り性のお父さんとしては本をまとめるためには必要な体験だと分かる気がするわ。でもあんまり家を空けないという短期滞在だったら許可してあげるわ。でも高齢者になると身体にだけは心配ねえ。私まだ一人ぼっちになるのは嫌だからさ」

と意外にもすんなり許可が下りた。

最初は寂しそうにしていた冴子だったが、直ぐ気持ちを切り替えたらしく、我がことのようの浮き浮きして、二階へ上がった。

まだ、社に居残っていた岸井聡子に電話をし、「今、帰って来た」と報告する。近いうちに北海道で暮らすことになるかも知れんぞ、とつけ加えた。

東京は梅雨入りが終って、本格的な夏の暑さがやって来そうな気配のある日、逃避行でもするように、冴子を伴って羽田空港を発った。

ひんやりとした女満別空港に降り立った親子は網走に向うバスの途中で降りた。冴子はホテルの脇にある大きな湖と静かな佇まいに驚嘆して大きな声を挙げた。

「私も一と夏、ここで暮らしたいなぁ。でも会社を辞めるわけにもいかないから、今回は我慢しよう。来年は彼と一緒に来ることにするわ。――いいわねぇ。お父さん、長生きするわよ」と笑った。

湖荘の女将さんに顔を出し、冴子を紹介した。その後、離れと思しき一角の別棟へ案内してくれた。先についていた小荷物はすでに仲居さんが運び入れてくれたらしい。幼い頃

母親と死別した冴子はすっかり女将さんと打ち融けて、屈託ない喋りが続いている。

一泊した冴子を見送りながら、女満別空港まで出掛けた。

夕方、戻ってみると、離れは掃除も行き届いて、快適な生活空間に模様替えされていた。

２ＬＤＫの住まいには、風呂場には洗濯機も据付けられており、何の心配も要らない。朝食は食堂で好きなものを自由に摂るビュッフェ形式で、夜は仲居さんが離れまで運ん

でくれる。

斜里の図書館で世話になった真由美の自宅に電話すると、ちょうど彼女が電話口に出た。先日のお礼と、その後のことについて、ざっと話す。

「そうですか。それでは現在は網走湖荘の離れに滞在して居らっしゃるということですね。私も斉田さんのお顔を見に出掛けますわ。今日明日とは行きませんが、来週の土日にはきっと出掛けられると思います。そのときは、こちらからお電話をさし上げます。愉しみにお待ちくださいね」といって切れた。

夕暮れ迫った湖畔を眺めながら、濃い目のコーヒーを特注して呑んだ。すっかり、森にも湖畔にも誰も人影はなく、旅荘の灯りが湖面を揺らしていた。

§

最果ての斜里陣屋に日々寒さが増し、どこも雪や氷で銀世界となった。
吹雪の後のオホーツク海では小山のような流氷が押し寄せては軋みつつ哭いた、岸の近くは水平線が見えない程の高さまで氷が積み重なり、藩兵たちはその凄さに越冬する気持ちさえ押しつぶされそうになった。
このような北方の厳しい自然の脅威に対して、僅かばかり国表から支給された防寒具の布団や着替えなどでは充分ではない。
松前や箱館で調達するように手配をしていたのだが、既に遅く他藩でも同じように急に越冬すると決まったから、注文がかち合い品物が底をつく始末であった。注文した数が揃わず届かない。古着さえ手に入らない始末だ。こんな有様であるから、ロシア船も来ないであろうと宗谷まででも引揚げてはという進言もあったが、幕命に背くことは絶対に許されない。この惨事に追討ちをかけたのは、米や味噌には不足はなかったが、越冬用の野菜は完全に底をついていて、なかでも新鮮な野菜不足が一層深刻なものだった。それが水腫による犠牲者を出す要因となったのではないか。――藩医にも最早打つ手がない。
　その後も、重病の足軽や人足たちが雪中、宗谷に向かって出発したが、途中で斃れ、そこの土となった。ついに幕吏の金井泉蔵までが病死し、暗澹たるうちに年の暮れを迎えた。
人手が足らなくなり、陣屋ではアイヌたちの手を借りなければ年を越せないところまできた。生き残った者は大工や鳶たちも炊事場で働き、飯炊き、水汲み、薪作りなど、どんな仕事でも働いていたが、その数も次第に減り、働き手も数えるだけとなった。
幕府方では、探検家の最上徳内など少数の上役と藩医の石井隆仙のみが元気であったが、毎日の暮らしには役立つ者ではなかった。
最後まで生き残った藩士たちに共通していえることだが、生きる気力が失せてしまった者が死んでいくということだ。執拗に生きようとする強い意志がなければ、生きることは不可能だ。水腫病（浮腫）と呼ばれる症状は「最初に便が渋り、足の甲より浮腫を生じ、次第に腰におよび、水腫れとなり、顔またむくみ、腹部が鼓の如くなり、苦痛を伴い、終には死亡するのだ。原因は定かでないが、寒気より来る

といい、また野菜の欠乏より来るともいう。これについては、古くから種々議論はあったが、アイヌたちには極めて少なく、和人に多かったようだ。こうしてみると、殊に、蝦夷地の風土に不慣れな津軽藩士たちに最も罹りやすく、季節でいえば夏は少なく、冬に多い。厳しい冬に罹り、春暖気に向かう頃になって多く死亡する。死亡率は極めて高く、不治の病とされていた。

悲惨な出来事が続き、文化五年元旦を迎えた。

「御役人ヨリ生根二十本、腫病ノ養生トテ贈ラレ、用イテげん験アルコト奇ナリ。朝鮮人参ノ如ク貴ベリ」と、生大根二十本がこれほど喜ばれたのだ。

いかに野菜に飢えていたかが想像できる。

斜里の警備に当たった、津軽藩兵は百名だったが、最後まで生き残って生還できたのは実に十七名だったという。

最近になって、漠然と北海道で骨を埋めるのもいいのではないかと考えている。真由美の愛しい心根を考えるとその方が良いに決まっている。

最早、遅い夏が間もなくやってくるはずだ。

〜了〜

野原　憲次

昭和十一年
北海道オホーツク管内美幌町生まれ。
北海道教育大（旧北海道学大）修了。道内各地で
四十年間公立学校教員を続け定年退職。のち、専門学校教員並びに
私大助教授等歴任、病気退職。
平成十六年頃より執筆活動に入る。
平成二十二年
コスモス文学新人賞受賞、日本文学館出版大賞特別賞受賞
平成二十三年
コスモス文学賞受賞